

# 令和4年度 第1回 国産材の安定供給体制の構築に向けた中央需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和4年6月21日（火）9:30～12:00
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom ウェビナー）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配布資料：別紙のとおり
- 5 概 要

## （1）冒頭挨拶

### ○林野庁林政部木材産業課長（齋藤氏）

中央需給情報連絡協議会の開催に当たりまして、一言御挨拶申し上げます。

御参集の皆様には、平素より、原木及び製品の安定供給に御協力をいただき、林野行政、とりわけ木材産業行政に御理解と御協力をいただいておりますことに対し、この場をお借りして御礼申し上げます。

今回も新型コロナウイルス感染症の影響で、webでの開催とさせていただきました。

また、昨年度の最後の中央需給情報連絡協議会の際には、まだロシアによるウクライナ侵攻という事態が発生していない状態で、昨年来のウッドショックの話を中心に議論させていただいたが、その後、皆様御案内のとおり状況となっている。

木材需給の状況におきましては、非常に不透明感が増しているといえると思う。改めて木材が国際商品であるということを再認識したところである。

そうした中で、一つの教訓として、国産材に求められているのは、安定供給体制の構築だということを改めて強く感じているところ。

そのためには、今後の川下側の安定需要が継続していくことが前提となるが、国産材がこれだけ求められるという状況というのは、なかなか今までにない展開ではなかろうかというふうに感じている。

依然として価格の高騰ということが続いているが、こうした中で、長期安定の取引の重要性ということをおぼろげにはおれない。

昨年、三回実施した中央需給会議の中でも、地区別の協議会の議論で、例えば安定供給協定を結んでいたが、なかなかそれが履行されきれなかったという話を聞くにつけ、協定取引の難しさを改めて感じたところであるが、逆にそういったつながりを持っている皆さんの中では、外材の入手が困難な中で、国産材をうまく供給できている事例というのも聞いて、改めて信頼関係の重要性を感じているところである。

年明け以降、ロシア・ウクライナ情勢が変化する中で、私どもとしても、様々な対策を講じている。令和3年度の補正予算、あるいは令和4年度の当初予算に加え、このたび、4月の末に閣議決定をした令和4年度の前準備費、こちらも全木連さんの御協力もいただきながら、全てのメニューが先週末までに公募開始ということで、対応を急ピッチで進めているところである。

こうした中で、去る6月1日には、日本林業協会をはじめとして、川上、川中の中央団体の皆様も、時代の要請に応える国産材の安定供給体制の構築に向けて、協同行動宣言が出された。これは非常に我々としては意義深い取組ではなかろうかと思っている。と申すのも、こういう場面に際して、業界団体みずから川下のニーズに応えようとする変化の現れというふうに高く評価している。

その際にも、持続的な森林経営を担保する形で安定供給をするという、非常に難しい取組にはなるが、これにしっかりと対応していくことが重要だというふうに考えている。

結びに、本年度もこの需給情報連絡会議、中央、地方、それぞれ今回の協議会も含めまして2回予定をしているところ。また、情勢にもよるが、年度内にもう1回開催する予定。御多忙の中ではあるが、皆様にも御協力をお願い申し上げ、私の冒頭の御挨拶としたい。

### 3. 議 事

#### ○座長(藤掛氏)

宮崎大学の藤掛です。

中央の会議にはこれが初めての参加。御出席の皆様の御協力をお願いします。

前回は1月に開催され、一定程度、需給の混乱は落ちついたけれども、価格は高い状況であること、原木は落ちついたが、合板やほかの住設機器の不足等の影響が住宅着工に影響していること、全体として、やはり国産材への流れがきておって、先ほど課長からの御挨拶のとおり、これまでにないチャンスといったような話が交わされたというふうに聞いている。

その後、ウッドショックは続いているが、その中で、ロシアのウクライナ侵攻等による、木材の輸出入禁止などの課題がある。

また、米国や欧州の住宅需給や景気の動向の変化やインフレの中で、燃料の高騰や円安など、大きく経済環境が変わろうとしていることが、昨今、この数か月の状況との認識。

一方、林野庁も総合緊急対策の中で、国産材転換支援金という対策事業等を始めている状況。

本日は、まず、林野庁、国土交通省からの情報、資料に沿った説明後、各地区協議会からの御報告をいただき、その後、各団体を中心に、全体的な木材の需給動向等についての御意見、御発言をいただく。時間に限りがあるので、質疑は最後に集中して行いたいと思う。今回は2時間半に設定したので、十分な意見交換ができれば良いと思う。

#### (1) 林野庁、国土交通省からの情報提供

##### ○座長(藤掛氏)

議事1、林野庁、国土交通省からの情報提供をお願いします。

まず林野庁から、資料1から8、それと参考資料について説明をお願いします。

##### ○林野庁木材貿易対策室(滝氏)

資料1、資料2について説明。

##### ○林野庁(永島氏)

資料の3、4、5、6、7、8、参考資料について説明。

##### ○国土交通省住宅局住宅生産課木造住宅振興室長(前田氏)

資料9と参考資料5について説明。

##### ○座長(藤掛氏)

一通り統計に基づいた木材需給の状況、及び、行政からの関連施策等についての情報提供いただいた。

続いて、議題2の地区協議会からの報告をお願いします。

#### (2) 地区別需給情報連絡協議会からの報告

##### ○北海道地区需給情報連絡協議会(工藤氏)

北海道地区協議会は、6月1日に開催した。その概要について、川下、川中、川上の順で報告させていただく。まず、川下の住宅建設関係では、木材ばかりでなく、全体的に値上がり、積算価格がお客様の予算と合わない場合があり、設計をやり直しても契約に至らない場合があって、この先行きに非常に不安感がある。

ステンレスやアルミといった材料とか部材がなかなか入ってこない状況があり、水回り関係では3か月から半

年待ちとなっている上に、価格は1.5倍ぐらいになっており、見積価格に転嫁せざるを得ない状況。結果的に契約に結びつかない状況が増えてきている。

木材不足に関しては、輸入材の入荷が進み、合板は不足気味であるが、その他については徐々に解消の方向。

非住宅物件は堅調であるが、住宅需要の落ち込み予想もあることから、今後の住宅の受注動向に木材価格が左右される可能性があるといった意見が出されている。

次に、川中の製材加工、流通関係のうち、カラマツ関係では、現状は残業も交えながら既存の需要に応じていくので精一杯という状況にかわりはなく、原材料の入荷が不足している状況。今年の夏以降、需要の減速懸念もあるので、木材の需給バランスがどうなるのか心配。

製材関係では、去年の加熱した状況から比べると落ちているが、工場はフル生産の状況で稼働している。原料の仕入れ価格は、特に今年に入ってから上がってきている状況。

集成材関係では、カラマツラミナの集荷に苦労しており、十分買いきれていない状況。また、価格に関しても、この4カ月で約50%上昇している。

合板関係では、フル稼働生産で対応しているが、さらなる増産の要望には対応が難しい状況。受注戸数、着工戸数が伸び悩み傾向にあるという話も聞いており、原木確保の状況と着工戸数の減少のバランスがどうなるのか注視していく必要がある。

製紙原料関係では、チップ工場には原料が集まらない状況が続いており、調達がうまくいっていない。一方で、製材工場が好調なこともあり、製紙工場向けの原料チップは順調に集まっている状況。

木質バイオマス関係では、現在のところ原料に対する不安感はそれほどないが、今後の原料の値上がりを懸念している状況。

流通関係では、仕入れ価格がどんどん上がっている中で、販売価格も上がっている。そのまま上昇していくと、道産材に固執することはないのではないかとの見通しが一部で出始めかけている。また、木材以外のものを考えざるを得ないという話もちらほら聞こえ始めているという状況。

北海道の木材産業構造の観点からは、原木不足の中で、原木を高い価格で買えない桧木や梱包材など、産業用資材は、重要な基礎資材であり、北海道において重要な役割を占めていることから、そこに対して原木をどう確保していくか考えないといけないといった意見が出されている。

最後に、川上の素材生産関係では、立木価格が上がってきて、伐採する数年後に木材価格がどうなるのか、利益を出せるのか、大変不安との声。

現場作業において、安全リスクを伴うので、急に増産できる体制にするには難しい。大型機械である程度増量は可能としても、大型機械で作業できる場所に限りがあるといった意見が出されている。

国産材、道産材を今後増やしていくことについては、利用側では、今後の状況によっては増やしたいとか、積極的に増やしたいとの意向はあるが、供給側では、生産量を拡大していくことになるので、資源や労働力の確保、施設整備といったところが課題として挙げられている状況。

## ○東北地区需給情報連絡協議会(一条氏)

東北地区は、6月2日に開催した。東北地区の特徴は、大きくは3点。①大型工場が多くあり、直送が主流になっていること。②国有林率が高く、供給量に国有林の影響が大であること。③冬季に原木が凍結し、工場の生産効率が落ちること。

需給動向、ニーズに関しては、合板製材、集成材用途のスギ素材は、大手工場が既に二、三か月分の在庫量を確保して一段落している。受け入れ制限が始まったところもある。時期的に、これから素材生産量が落ちるので、今が在庫量のピーク。秋までの間、使用量と補充量のバランスが鍵。

スギ価格が下がるという見方もごあるが、スギのA材の価格が上昇している地域もある。

カラマツ素材については、供給不足で引き合いが強く、依然として高値が継続している状況。

製紙業からは、チップ材、パルプ木材の入手が、針葉樹、広葉樹ともに難しい状況。特に広葉樹原木については、針葉樹材の価格高騰により、生産が針葉樹に偏重したため、これまで長年の経験の中で記憶にないほど入荷量が少なく、危機的な状況、原材料不足で、生産をスローダウンせざるを得ないという切実な意見もある。

地域的には、針葉樹価格が上昇しているという情報も。

住宅に関しては、合板の入手が難しく、県産材補助等を使うために、受注時期を延ばす必要も出ている状況。加えて住宅に関して以下の意見・情報もあった。

- ・実行予算とかげ離れていくところが懸念されるという意見。
- ・1軒当たりの建坪が小さくなり、販売価格が下がっているという情報。
- ・ウクライナの関係では、ロシアの影響を見込んで、スギの集成材、間柱、野縁が売れていたのは、見込み需要ではないかという意見があり、プレカットも流れが悪く、在庫量が増えている状況。
- ・ロシア材の単板は、代替によるカラマツ利用が特需となり、数量の確保ができない。
- ・合板のアカマツ丸太について、1月から3月ぐらいまで、流れがよかったが、前行程となる単板製造がボトルネックになり、引き合いが弱くなっているという情報。特に青森、岩手はマツクイの未被害地があるので、アカマツ利用が課題ではないかと思う。

海外の状況等については、輸入材が高いという価格的要因から、国産材への転換、それから、入荷が不安定なことから、安定性を求めて国産材へ転換する動きが、川中、川下にある。今まで声のかからなかった規模の大きなプレカット工場から注文があるとの声。

港には輸入材の在庫が多い状況。秋ごろに入荷するEUからの輸入材の価格帯が気になる。また、円安による価格の上昇も想定される。

国産材への転換の取組状況については、これまでも柱、間柱、桁、梁等に利用しているが、国産集成材の強度が出れば、さらに使っていきたいとのこと。

異樹種による集成材を含めた横架材利用は研究者の課題でもあるという意見もあった。

PKSを利用しているバイオマス発電所が国産材を入れ始めたという情報もある。

需給対応の取組としては、川上、川下、共通して人材確保が難しい。入国制限の緩和により、技能実習生が戻ってきたので、昨年よりは期待ができるという工場もある。

また、人気のないスギ大径材の活用を検討しているという情報もある。施設と機械の導入には価格の安定が鍵となる。

地域や業界の課題について、ストック機能をどこが持つか、効率的なストック機能を果たすためにはどうすればいいか、SCMの強化とともに課題。

また、木材は、生産から製品販売まで時間を要することから、需要、価格にタイムラグが発生する。ジャスト・イン・タイムでは成り立たないことを認識する必要がある。

森林所有者から、立木を高く買ってほしいという要望がある。現在の価格がいつまで続くものか、見通しが立たない状況。価格の安定により、買取り価格の合意形成ができて、再造林が進むことを望むという意見がある。

その他、電気料金、燃料代が上がり、経営を圧迫気味であるという意見も。

## ○（一財）日本木材総合情報センター(永井氏)

関東地区事務局長が欠席。栃木県森林組合連合会からの概要メモを代読する。

関東地区協議会は、6月20日に開催され、現在の需給動向や国産材への転換状況、今後の見通しや課題等について意見交換を行った。

まず、川下から報告する。

現状は、トイレや給湯器等の住宅設備の調達難により、住宅の引き渡しができないとの影響が大きいこと。

合板の需給状況については、事業者の調達先等の状況により異なり、一概に不足しているとはいえない状況。

また、資材高騰による住宅への価格転嫁については、顧客との調整に苦慮しており、特に中小の工務店等が苦しい状況とのこと。

川中に対する木材の価格への意見として、木材の急激な価格上昇は、顧客との調整がうまくいかず、経営への影響が大きいことから、安定的な国産材の供給と、一定程度の高値でもよいので、価格の安定が望ましいとのこと。

次に、川中について。

製材工場から、昨年来のいわゆるウッドショック等の影響で、一定程度、国産材への転換が進んでいるとのこと。全体の生産量に対して、転換した生産量の割合や、部材等の具体的な内容を含めて報告があった。

今後は、スギ平角の活用が課題であり、十分耐力があることも分かっているものの、集成材の活用がある一方、無垢材の使用については、まだ工夫が必要な場面があるとのコメントがあった。

製品の安定供給に向けては、乾燥がボトルネックとなっているとの意見が多くあった。

施設整備は短期間では難しいこともあり、これまでも各社、増産に取り組んだものの、急な増産とはいかなかった状況。

合板、LVLの加工事業者からは、ロシアの単板輸出入禁止による影響の報告があった。

国産材への転換を中心に、代替材を模索しているが、新たに乾燥の工程が必要になることもあり、課題は多く、今、精一杯検討を進めているとのコメント。

流通側からは、これまで在庫が少なかった合板も含めて、各社、在庫十分な状況で調整に入っている事業者が見られるとの報告があり。価格の弱含み感も感じられるとのコメントもあり。

また、ロシア関連でいうと、輸入禁止された単板等以外の製材については、淡々と材が入ってきており、港に在庫もあり、荷動きが悪いとの報告もあり。

次に、チップ工場からは、海外の情勢から、今後、積極的に国産材を集めたいが、価格が高く、集めにくい状況とのコメント。

最後に、川上からの報告。

出材については、降雪等で一時的に少なかった地域や順調だった地域等、関東地区協議会も非常に広い地域の構成員から構成されていることもあり、様々な状況が聞かれた。

今後は、雨や雪で出材が減る季節にはなるが、いわゆるウッドショックを受け、今後の安定的な供給を目指して、体制強化したいとの意見もあったが、海外の状況や国内の需給動向等に不透明な要素が多く、慎重にならざるを得ないとのこと。

苗木関係は、コンテナ苗の活用が広がっているが、一方で、労働力不足が深刻であるとのコメントがあった。

このように、関東地区では、今後の国産材活用の推進について、前向きな意識を持つ関係者が多かったものの、課題についての意見も出されたところで、座長からは、林野庁による一時保管の事業なども活用しながら、川上、川中、川下のリードタイムを縮めることと、地域のサプライチェーンをより強固にしていくことが重要であるとのまとめをいただいた。

## ○中部地区需給情報連絡協議会(水嶋氏)

中部地区協議会は、6月9日に実施した。信州大学の植木先生を座長として、中部地区の現状と見通し等について分野ごとに構成員から説明し、意見交換を行った。

まず川下であるが、住宅メーカーでは昨年の12月時点との比較で、住宅の販売量は各社前年並みとのことである。ただし、販売価格は概ね5%から10%上昇しており、今後もさらに上昇する見込みである。

一方、木材の供給は、年内まで安定的に供給されるが、それ以降は不透明な部分はある。価格面では、高値が続くとの見通しが示された。

また、設備については、商品によっては入荷の遅れも見られる状況であり、大工、工務店等も同様に、高値安定の状況で設備関連の供給不足から、木材だけの問題ではないという認識にある。

川下の意見に対して、川中からも同様の意見が出ており、加えて名古屋港でも3月以降、輸入木材の在庫が一杯で、これをこなしていくやり繰りは大変だという認識である。また、7月から9月の第3クォーターの契約の価格が高い木材が入ってきており、特に羽柄材は強気で量も少なく価格交渉が難しくなっている状況で、関係者は、過剰在庫の消化に必死で、円安・ユーロ高がネックになっているのではないかとのことである。

こうしたことから、今後もこの外材の影響が国産材の動きにどう影響するかを注視する必要があるという認識である。

また、針葉樹合板は、中国からの合板やパーティクルボードが7月から入荷予定であり、単価は強気であるが、品質等の不安定要素があって、果たして使っているのかという不安も抱えている模様である。

次に、川中からは製材品の生産状況や国産材の確保、安定供給体制について意見があった。

製材分野のうち原木については、伐採時期どおり順調に入荷しており、買い取りの価格も上げてきている。現在、フル生産の状況で、需要に応じて何とか供給をしているところである。

しかし、今後の需給状況の先行きによっては、施主が価格高で注文を見合わせることも危惧され、また、アメリカの金利の上昇やヨーロッパの現状を不安視している状況もある。

また、製材用のスギ、ヒノキは、原木の入荷が秋口まで順調の見込みであるが、工場の働き方改革の影響により、人手不足という課題もある。

さらに、合板の供給不足、輸入材の過剰もあるが、使う材の仕様の変更で何とか乗り切っている状況であり、逆にLVLはスギ価格の高騰により、山元へ利益を還元できており、入荷は安定していると聞いている。加えて、アカマツは長野で需要が増え取り合いになっており、ヒノキは高値で落ちついている状況で、カラマツは、集成材ラミナの需要増によって単価が上昇していると聞いている。しかし、製材製品には価格にあわせて転嫁できない状況にあることが悩ましいところである。

国産材は、今、高値安定と言われているが、今ぐらいの値段が適正ではないかという意見もあり、価格によっては、生産する側の生産意欲につながるの考えもあり、安定取引や安定した品質と量を確保するには、販売先への仕組みをどうしていくのが課題で、今後、国産材を増産した場合の対応として、ストックヤードの設置を求める意見も出ている。

次に、原木市場等の流通状況である。

中部地区は、スギは今、高値で推移しているが、ヒノキは今、下がり始めの状況であるが、入荷は15%ぐらい増加している。特に、中部地区の特徴でもある元玉の取引については、元玉の下落が非常に大きく、スギの値段がつかなく、ヒノキも元玉との価格差がなくなっている状況にあり、懸念材料である。

カラマツは、広範な需要で価格が上昇し、常に足りない状況で、出荷量をどうやって確保するかが課題である。

製品市場は、5月まで順調だったが6月に入って減速しており、顧客からの相談もあって荷動きが非常に悪い状況にある。また製材販売は、安心して販売していくストックヤードが必要との意見がある。

次に、川上の状況であるが、スギは引き合いが非常に強く、ヒノキが弱含みなので、スギへシフトしているという事業者もある。先ほども、適正価格という話があったが、出どころが非常に難しく、山側は非常に高値でありがたいが、やはり請負となる事業者と、依頼する森林所有者との認識の違いが表れている。また、生産量は、コロナ以前の同等プラスアルファで対応しているが、やはり労働力が不足している。

さらに、最近では林業機械の更新が非常に困難な状況になっており、資材の高騰もあり買えない状況で、注文しても1年ぐらいかかり、それに加え伐採班の確保が大変である。

最後に、植木座長から、「新たな川上での課題も出てきており、今後は林野庁の予備費を使った新たな予算を使っていくのも重要ではないか。今後も、中部地区ではサプライチェーン構築のため、構成員の方々と様々な意見交換を行いながら、事業を進めていくことが重要と考えている。」との発言があった。

## ○近畿中国地区需給情報連絡協議会(横谷氏)

近畿中国地区は、6月3日に、京都大学の松下教授に座長を務めていただき、総勢48名の出席で開催した。

まず、川下について。

国産材の材料調達において、春先までは全ての部材において苦勞していたが、現在は、合板、スギ集成柱を除き、解消されている状況。ただし、住設機器の調達は、やはりベトナムのロックダウンの影響等で、依然、不足しており、着工の遅れに影響を及ぼしている。

価格転嫁は中小工務店では進んでおらず、合板価格のさらなる上昇や、住設機器の調達による工期遅延による経営の圧迫が心配されているという御意見があった。

新規受注も、12月以降、低調で、プレカットの稼働率も90%程度が続いており、今後の動向を不安視されている御意見が多かった。

明るい話題として、地域住宅において、脱炭素の流れが生まれてきている報告もあり、国産材、天然乾燥、内装も自然素材による建設時にカーボンを下げられる勉強会等に取り組みされている事例も御紹介された。

続いて川中です。

業態により状況は異なっており、国産材の確保は、バイオマス発電事業者を除き順調で、潤沢に入荷している状況。製材、集成材、合板各社ともに、国産材比率を上げ、フル生産を行っているが、やはりボトルネックは、

乾燥能力や人材の確保である。

部材によっては荷余り感も出てきており、3.5寸の製品よりも4寸が荷余りの状況が続いているという報告もあり、今後の住宅着工の推移には心配、注視している意見が多い。

外材については、米マツが産地価格の上昇に加え、為替のリスク、船運賃の高騰により、不安な状況が続いているが、欧州材の流通在庫も多いので、製品価格には転嫁できていないとの意見あり。

また、新たな試みとして、合板工場では、早生樹などの新しい樹種への対応について、今、試験的に生産して、乾燥時間やプレスの仕方など、トライしているという意見もあり。

最後に川上。

北部の地域では、積雪の影響を受け、出材が遅れていたが、現在はおおむね計画どおりの生産に戻ってきており、さらに国産材原木の需要増加の流れを受け、増産に取り組んでいる状況。

価格面は、ヒノキ原木は下がり基調であり、スギ原木は春先の上昇から維持されている。

今後の増産に向けての課題として、民有林施策が多いので、間伐施策中心であり、皆伐施策地の確保、また、労務力増大に向けて、素材生産者の育成、運送トラックの輸送力確保等の意見が出され、山林所有者に対し、再造林ができて利益が残る適正な原木価格及び素材生産者の育成に向けては、労働災害の多い労務に見合った賃金水準の引き上げができる原木価格の維持を川下をお願いしたいとの意見があった。

#### ○四国地区需給情報連絡協議会(福吉氏)

四国地区は、今月8日に開催した。

まず、原木価格については、先ほど来からあるように、ウッドショック以来高騰が続いているが、少し落ちついてきた感があるかなというところ。

特にヒノキについては高値で取引されていたことから、出荷量が非常に増加しており、値崩れしてきている状況で、在庫も増えてきている状況。

一方、スギについては、若干高値が横ばいとなっている状況で、ヒノキへ出材を切り替えたことから、原木不足が生じており、引き合いが強い状況。

製品価格についても、落ちついてきているが、高値で取引されている。原木調達において、米マツの高騰から国産スギへ移行しているところがあり、まだしばらくはこの状況が続くのではないかと情報もある。

パルプ、チップについては、大型バイオマス工場が四国各県で稼働しており、その中で、また新たな大型バイオマス発電工場が来年3月稼働予定で、今後、原料の調達がなかなか難しくなってくるという話があった。

四国地方は、今月13日に梅雨入りとなり、今後、虫害等も心配され、出材への影響が出てくるのではないかと思うが、原木価格の高騰が続く今は、一定程度、出材されるものと感触を得ている。

ただ、今後は、外材に左右されるところも多く、先行きは不透明との意見が多数を占めている。

外材の影響を受け、国産材にも大きな影響を与える中で、国産材自給率が増加して、4割を超えているという発表もあったが、一気に国産材主体は困難であり、国産材の安定的な原木供給がより重要視されている状況。

こうしたことから、山側では、機械の大型化はもとより、大型車両が乗り入れられるような林道整備がより必要となっている。

さらに、高齢化による人材不足で、担い手対策として、高知県では、林業大学、緑の雇用等、活用を図っているところであるが、人数に限りがあり、早期に外国人登用についても検討をすべきと考えている。

高知県では、林野分野への外国人技能実習生の受け入れを進めるため、県内製材業者、5社が協同組合を5月末に設立して、来年度、10名程度の実習生受け入れを目指す予定。

ただ、林野分野での実習期間が1年であり、国では今回、機械製造の実習生は3年まで在留できるようにする見通しとのことだが、後で情報をいただきたい。

また、皆伐が非常に増えてきているので、生産事業とあわせて、造林事業への対応も重要と考えている。

製材については、現在、工場はどこもフル稼働という状況だが、成熟期を過ぎて、ますます増加してくるスギの大径材への対応としての販売対策が必要となっている。

現在、105角が主流となっているが、丸太が大きくなってきており、歩留まりが非常に悪い。120角の使用を増やせば、製材も歩留まりが上がり、製品単価を抑えられるとの意見もあった。

また、天然木や高齢の木材を扱う小規模な製材業者の技術の継承なども必要ではないかと考えている。

以上のことから、将来に亘る国産材活用については、安定的な供給が重要であるため、原木価格や製品価格が補助金なしで経営できる価格の設定や、林業・木材産業界における人材不足に対する外国人雇用を含めた人材確保と育成、こういうことを進めることが重要であると考えているので、国として積極的な対策をお願いしたい。

### ○九州地区需給情報連絡協議会(田中氏)

まずは輸出入です。

輸入については、昨年後半から回復傾向になって、現在も大きな変動はないが、ロシアのウクライナ侵攻の影響で、一部木材が輸出入禁止になるなど、引き続き注意すべき状況。

輸出は、やはり上海のロックダウンの影響がかなりあり、中国の港には、丸太があふれている状況。6月に入って、それが順調に中国国内で出荷され、港から丸太が動いているという状況になってきた。ただ、港にあふれかえったという状況で、今年、上海港着で年明け早々は約160ドルだったが、今は約145ドルとなり、やや下がっている状況。

今は輸出用の丸太は順調に動いている。6月以降の需要を見込んで、商社さんが買い集めているため。ただし、値段は少々落ち気味というところ。

続いて、川下です。

川下は、ウッドショックの後、木材の入り方は回復傾向。ただ、製品価格については高止まりしている状況。

そして、上海のロックダウンの影響か、アルミ価格であるとか、サッシとか、いろいろなものの値段が上がっている。坪10万円ぐらいは値上げしないと厳しい状況。この状況のため、見積りを出しても、予算オーバーで契約が成り立たないという状況が見られる。

工務店協会から、木材価格が上がるのは賛成だが、急に上がるのはなかなか厳しい状況であるとのこと。

続いて川中、プレカット、木材自体は、今、注文したら順次入荷できるという状況。

値段の高止まり感が出てきている。今のところ部材的には不足感はないというところ。

続いて、製材です。

製材品は、皆さんのお話のとおり、だぶついてきているという状況。製材業も、今の単価をできるだけ値下げしたくないという考え。価格をキープするため、生産調整など、価格の維持に努めているところ。

今のところ、作った分は売れており、値下げの話もあまりないので、現状で進めば良いと思っている。

製材工場は、今まで苦難の時代だったところもあるので、この価格をキープしたいと思っている。

そして、外材から国産材への切り替えは、大型製材工場がかなり進んできている状況。

ただ、プレカット工場等の製品のだぶつきが、ちょっと下げの要因にならないか、心配しているところ。

そのプレカット工場も、大体平均すると80%から90%ぐらいの稼働率で、受注残が少ないことに頭を痛めていると聞いている。プレカット工場間の価格競争が始まって、少し困っている状況。そのため、今後、資材の高騰から、住宅の買い控えが一番危惧しているところ。

製材工場、北部九州はJAS製材品の作れる工場が少ないので、これも課題かなという意見も出た。

次に山側です。

川上としては、今、安定供給に向けて、出材量が約10%以上は増えている状況。増えているが、再造林がかなり遅れている。非常に危機感がある。

丸太価格は徐々に下げながら、横ばいに入っている。丸太価格は、令和3年の6月で、スギ、ヒノキの平均が1万9,119円。直近の令和4年5月のスギ、ヒノキの平均が1万3,333円と、ピークから比べるとかなり下がっている状況。九州の丸太価格は、立方当たり、平均1万5,000円は欲しい。その単価であれば、事業もしやすいので、この単価を出して欲しいところ。

苗木生産も、植林がかなり増えているが、急には増やせないで、今のところ不足状況が続いている。

### ○座長(藤掛氏)

各地区からの状況報告に感謝する。

少しずつ各地区で状況が違うということが理解できたかと思う。

### (3) 木材の需給動向及び国産材への転換等への支援について

#### ○座長(藤掛氏)

次の(3)に移ります。全国の団体から報告をお願いします。

日本木材輸入協会針葉樹部会様並びに南洋材・合板部会様、JBN様、木住協様、全木連様、合板工業組合様、集成材工業協同組合様、LVL協会様、全森連様に、まずはお話いただきたい。その後、時間があれば、その他の団体の方や、各県の方などから御意見いただきたい。

#### ○日本木材輸入協会針葉樹部会(眞竹氏)

輸入の針葉樹について、製材品を中心に、米材と欧州材に分けて、各四半期ごとの状況と見込みを説明する。

まず、米材について。

第1四半期、1月から3月について、SPFの製材品については、日本向け価格の高止まりの影響で、最低限の受注にとどまっていたが、ロシアのウクライナ侵攻の影響もあり、3月の成約あたりでは一部駆け込みも見られた。

米マツの小角や垂木については、現地生産の遅れ、あるいは一部洪水に伴う物流の混乱によりまして、契約数量自体が伸びなかった。

結果、第1四半期の入荷については、前年同期比、若干減少という結果となった。

続いて、第2四半期について、SPFは、北米市況価格が高騰したので、先ほど申した3月の駆け込み分の入港は見られたが、価格面から、最低限の受注にとどまった。一部、ホームコンポーネント関係では、ウッドショックの反省もあり、例年並みの発注が行われたと見ている。

米マツの小角、あるいは垂木、この辺は、ロシアからの供給不安に備えて、価格は高かったものの、ある程度受注は進んだと見ている。しかし、トータルではやはり前年比減少というふうに見ている。

第3四半期について、SPF製品の現地価格は調整局面に入っている。ただし、円安が御承知のとおり急激に進んでいるので、円建ての価格は大幅には下がっていないので、各地区、説明があったとおり、国内在庫も多いため、ここは最低限の成約にとどまるのではないかと予想している。

米マツも、前回クォーターである程度発注がまとまっているので、各プレカット工場も十分な在庫を保有しているという中で、発注調整ということになるのではないかと予想している。

第4四半期は、まだ見通しは難しいところであるが、価格と需要にもよるが、ここまでかなり長きにわたって発注を抑えているので、若干回復して、前年比横ばいぐらいにはなると予想している。

続いて欧州材。

まず、第1四半期は、昨年末の欧州マーケットの鈍化、これに加えて、船会社さんが一部臨時船を投入したこともあり、船積みが遅れたものが集中入荷したというところで、今年の第1四半期の入荷大幅増につながったものと思う。

第2四半期については、先ほど申した第1四半期と比べると成約数量は減ったものの、契約材もあるので、引き続き堅調な入荷をしたのではないかと見ている。

第3四半期については、通常、一部夏休みに入るサプライヤーがいるので、在庫数量は限定的になると見ている。ただ、一方で、ロシアの影響で、かなりものが集まりにくいのではないかと見ていたが、欧州市場の需要の停滞であるとか、あるいはそこと比べた日本向けの価格の優位性というところから、オファー数量自体は予想よりはまとまったと見ている。数量については落ち込むが、去年はウッドショックがあったので、前年比では若干増と見ている。

第4四半期は、現地価格は調整局面に入ると見ている。ただ、日本側の需要もあまり活発ではないと見ており、引き続き限定的な受注と予想する。

ロシア材は、この先、3月、4月以降について、各輸入業者、我々も含めて、不安定要素が多いので、成約は進んでいないものと思われるが、先ほど米材、欧州材で申した状況で、少なくとも今年中は大きな影響にはならないのではないかと見ている。

## ○日本木材輸入協会南洋材・合板部会(藤本氏)

まず、南洋材の丸太について、南洋材の丸太の市場自体がもうかなり限定されており、入荷状況等は、四半期ベースで1万から1万2,000立米で、比較的安定して入ってきている。

当然、市場があまり大きくないので、大きな伸びというものはないが、一つ、マレーシア、サバ州から原木の輸入が再開されるということで、この辺の動きが今後注目されると思う。

ニュージーランド、チリの原木、製品の動きは、こちらも業界は梱包業界が中心であるので、比較的ウッドショックの影響を受けておらず、材のタイト感というのも、ほかの樹種と比べると比較的少ない。

ただ、非常に中国の動向、中国のラジアタパインの購入量が多いので、そこの相場及び海上運賃、ここで相場が変化するということですが、総じて見ると、昨年比較では安定して入ってくると予想している。

四半期ベースで数字をいうと、ニュージーランド材のラジアタパインの船が大きいので、前年同期とは、四半期ベースではなかなか言いにくいですが、こちらは比較的安定的に入ってきている。

続いて輸入合板。

4月までの輸入実績が出てきているが、前年同期比だとおおよそ10%増、21年度比較、10%数量が多い状態で、22年1月から4月まで推移している。

特徴的なのは、中国からの針葉樹合板が増えているということ。ただ、中国だけで見ると、前年同月比、これも全体と同じように10%増ぐらいで推移をしている。

ここはちょっとややこしいが、昨年度、ウッドショックの影響を受けて、中国のLVLの入荷が増えた。ただ、22年度に入り、ちょっと落ちついている。

そのかわり、これはロシアの影響、日本の国産合板の需要を目掛けて、針葉樹合板が増えていると。実績ベースでいいますと、4月で1万2,000立米ぐらい入っているという数字が出ている。

中国側のいろいろな話でも、4月に入荷が増えるだろうと日本では見ていたが、やはりまだもう少しこの状況が続くようで、正確な数字は分からないが、5月、6月、1万5,000から、単月で2万立米ぐらいまで入ってくる余地はある。

しかしながら、中国産というとちょっと安いというイメージがあるが、実はそんなにコスト的には安くなくて、一方、JASの認可はとっているが、やはり市場では若干品質に心配があるということで、一般流通にはそんなに多く流れておらず、ある特定の部分に、特定のお客さんとか特定の場所でクローズなマーケットで流通していると見ている。

輸入合板の今後ですが、まさに今の第2四半期は、前年同期比増加だが、海上運賃が高値張りつき、さらに円安ということと、日本国内の需要も少し一服感があり、第3四半期以降は前年同期ぐらいの数字で推移するのではないかと見ている。

## ○JBN・全国工務店協会(坂口氏)

足元の需給動向については、今現在は、地域工務店の受注は減少しており、一部の注文住宅の価格がかなり高騰している。昨年度、3,000万円だったものが、高い工務店だと、今年は3,800万円になっており、住宅ローンが組めない施主が、注文住宅をあきらめて分譲住宅の購入に動いているということも聞かれています。

また、地域工務店の受注が落ちているため、地域工務店の物件を加工するプレカット工場の稼働率もそれに合わせて低下しているようなことが聞かれています。

前回、1月開催以降、ウクライナ情報の影響が入ってきて、3月の仮需要でロシア産のアカマツとかホワイトウッドとかレッドウッドの集成材が動いていたが、現在の動きは落ちついている状況である。ロシアからの入荷はまだあるため、仮需要で需要を先取りした分、今、売れ行きが悪いと聞いている。

合板は、入手しにくい状態が続いていたが、中国製の針葉樹合板が出回り始めて、幾分、需給が緩和されている状態であり、市内の木材小売店にも中国製の針葉樹合板が入荷し始めていると聞いている。

その他、海外の状況や国内の需給動向を踏まえた今後の見通しとしては、今現在、アメリカの住宅需要が、住宅ローン金利上昇で大幅減が予想されていること、また、住宅需要と並ぶもう一つの重要な柱であるDIY需要も

停滞している、自然災害が起きない限り、アメリカ木材価格は低い状態で落ちつくと考えている。

その他、ヨーロッパも金利上昇で木造建築プロジェクトの延期が相次いでいるので、木材需要が落ちついていると見込んでいる。

輸入材の価格については、コスト高ながら需要が減るので、下落傾向が続くと予想しており、国産材も輸入材につられて安くなると考えている。

なお、日銀が10年国債の誘導金利をもし引き上げた場合は、日本国内住宅需要の大幅な落ち込みが予想されるので、それにつきまして、持ち家が減少した分を分譲住宅とか貸家の増加で補っている状態だったが、金利が上昇した場合は、持ち家率がさらに減少し、分譲住宅なども減少に転ずると予想している。

国産材へ転換の取組状況としては、ロシア産のアカマツは今後も中国経由で入荷するものと考えており、施主とか住宅会社のロシア産に対する拒絶反応は今のところ感じていない。

その他、ホワイトウッドやレッドウッドの集成材も、今のところ在庫が潤沢にあるため、国産材への転換はあまり進んでいない状況。

金物工法に対応したムクの国産材供給が少ないことも、国産材への転換取組状況が進んでいない原因の一つと考えている。

その他、地域や業界の問題や課題として、価格下落の局面では、輸入数量が大幅に減少すると考えている。

あとは、木材市場が下落した場合、コスト割れでの販売を余儀なくされるため、特に欧州材は契約から到着まで時間がかかるので、到着したときにコスト割れでしか販売できない可能性も高く、輸入数量は大幅に絞られると考えている。

合板は、日新合板の工場が火災の影響で、今後、需要が高まると思うので、高値のまま推移する見込み。工務店の方々は、日新合板工場火災はかなり大きな痛手と見込まれており、長尺針葉樹合板ですが、当面、手に入らないと予想されるので、高値が続くのではないかとされている。

## ○日本木造住宅産業協会(越海氏)

先週、木住協の中で運営委員会が開かれ、委員長からいろいろ質問を出し、全体像を把握したのですが、大雑把に言えば、価格は高止まりではあるが、木材関係の不足感はないようだ。いろいろ調達や在庫で御苦労いただいた賜と思っているので、ここで関係各位に御礼申し上げる。

反面、設備は一部まだ不足をしている、あるいは遅れているという話があり、これは上海のコンテナとか、日本はおさまっているが、オミクロンが世界中であちこち増えているので、散発的に設備と部品の関係で滞っている例はありそうだが、これも徐々に解消に向かっているかと。

設備メーカーとしては、在庫がなく、値引きせず売れているので、今年はかなり大儲けしているのではないかと個人的感触。

住宅着工については、昨年度の第4四半期、1月から3月は、御案内のとおりオミクロンの影響もあって、1割以上落ちているということで、受注実績は各社とも落ち込んでいるが、年間通して86万戸という数字が出ているので、一昨年同様にコロナで81万戸と比べると、最後はちょっと息切れしたが、何とか86万戸もっているということ。

今年も大体同じぐらいの86万戸かということで、いろいろなコンサルタントが推計を発表しているが、4月の受注の動向が、住団連から出てきたところによると、回復するかと思っていれば、それほどでもないという状況の数字が出ているようでして、旭化成だけが大幅伸びてはいたが、これはヘーベルですから木造ではないので、木造関係については、4月はあまり芳しくない。ということで、今年はコンサル関係の86万戸に比べると、住団連の大手の各社の平均的な見通しとして、今年度は84万戸台ぐらいかなという感じの弱気な見通しが今のところ出ている。

5月の展示場の来場者については、連休も当然あるので、それなりの数字は出ているが、昨年同様の来訪者でするので、基本的には回復途上のまま推移しているということかと思う。

最後に、運営委員会の中で話題となったのが、ロシアから輸出が止まっても、中国経由で製品として出てくるということで、あそこもJAS工場ですが、JAS規格に合わないJAS製品が出てきているようで、先ほども幾つかお話をしましたように、中国から来るものの品質については要注意ですねということで話があった。

それ以外にも、半導体の話は全業種に関わっているが、特に工場で製造設備のメンテナンスで半導体が不足して、そちらの製造能力がうまく維持できないというのは、これは川上、川下、全てに関わることで、半導体の状況が、ほかの産業と同様で、少し気になる場所である。

### ○全国建設労働組合連合(高橋氏)

全建総連は、JBNの皆さんより少し規模の小さな中小零細の工務店、大工を組織している組合団体。

3月中旬から4月にかけて、工務店に対するアンケート調査を実施し、1,090社余から回答をもらった。

その中で、工事費見積価格への影響を聞いたら、「大きな影響が出ている」と「影響が出ている」、合わせて97%の工務店が、客出しの値段がかなり上がっていると回答している。新築でいうと、20%以上見積価格が上がっているというのが、回答者の44.2%に達しており、リフォーム工事でも20%以上上がったというのが33.1%でした。

その原因としては、原材料価格、特に木材の価格が昨年同期比よりも調達が上がっているということ、その他の設備や建材価格の高騰の影響が大きく出ているということです。

最近、建材関係で入手困難になっているものは、浴室乾燥機ですとか、内装屋さんが今大変で、結構クロスの接着剤の入手がなかなかできないとか、そんな話も出ており、現場レベルでは非常にさまざま苦労があるという報告を受けている。

その中で、受注そのもので、量的な問題より、利益率の低下がアンケートの中でも示されており、その辺の価格転嫁、上がったものを全てお客様に転嫁するということがなかなかできていない事業者が零細事業者の中には多いということがアンケートの中でも示されていた。

木材関係では、神奈川県内の工務店3社ほどヒアリングを数日前にしたが、やはり合板の関係で、構造用合板は、落ちついてきたと言われていたが、仕上げ系のツキ板だとかシナ合板だとか、そういうものの入手が困難であると指摘された工務店もいた。

いずれにしても、来月もアンケート調査を改めて実施をして、現場の実態を把握していきたいと考えており、全建総連として、3月9日に木材利用促進協定を国交省や農水省と締結をして、改めて国産材の利用促進を各地域で運動として、川上の皆さんとも連携しながら取り組んでいきたいと考えているところ。

### ○全国木材組合連合会(本郷氏)

製材部門では、現状で、コロナ以前の生産量に戻っていると思っている。施設、労働力の面から見て、生産能力の上限に近い状況と思っているが、林野庁の資料にもあったが、需要側の求めに応じて生産量を確保していることは、合板の生産量だとか、住宅着工戸数とほぼシンクロしているような月ごとの増減を見せている状況であることから分かると思う。

一部に、設備の調達だとか、木材の価格、あるいはその他の資材の価格の高騰などで、住宅着工の減少を見越して、荷動きの停滞が見え始めているというような声も聞こえるが、スギの製材品の価格、ヒノキはちょっと落ちているけれど、スギの価格動向から見ても、これは思惑として聞こえている感じがする。

国産材と競合している製材、集成材の輸入量も、今年に入ってからコロナ前に戻っていて、港頭在庫も多いと聞いている。今後、国産材と輸入材がどちらかに偏ったり依存するという状況にならないように、国産材の生産、供給の安定に向けて、地域で山元から需要者までの連携をしっかりと固めていくということを5月の総会でも確認している。

ロシア材について、5月の総会の時の話なので、一月たっているのもちょっと自信はないが、今のところロシアからのいわゆる半製品と言われているものが入っていて、製材工場としては、原料不足だとか、価格高騰だとか、そういう影響はあまりないということのようだ。

ただ、ロシアから直接入ってきている製品が、非常に在庫がたまっているということも聞いており、これからこの製品、在庫がどう解消されていくのかということには非常に注視しなければならないと思っている。

また、林野庁から国産材への転換の事業について、詳しく説明があったが、現在、公募中。

原木の製品の一時保管と、工務店の国産材転換の事業は、都道府県の県木連が窓口になっている。

原木製品の運搬事業については、全木連の受け付けなので注意をお願いする。

### ○日本合板工業組合連合会(上田氏)

合板の原木と製品について報告する。

合板原木は、今では9割が国産材となっており、先ほど林野庁の資料3にあったのは、国産原木と輸入材を合わせた数字。近年の国産原木の年間入荷量を見ると、コロナ前475万<sup>m</sup>、それがコロナのとき、1割減って420万<sup>m</sup>、昨年はまた戻して466万<sup>m</sup>と、コロナ前の98%ぐらいまで戻っている。

今年の4月までの入荷を国産材に限ってみると185万<sup>m</sup>で、前年同期に比べて19.6%増加。原木の在庫が昨年の秋頃から徐々に増えており、昨年の月末在庫量は、一番低いとき、28万<sup>m</sup>ぐらいだったが、4月末だと59万<sup>m</sup>ぐらいになっている樹種によって手当に差があり、スギはそれなりに手当できるようになってきたと聞いている。ただ、カラマツ、ヒノキは、ロシア制裁によるラージ単板輸入禁止で、代替材を各社とも探している。その中で、カラマツ、ヒノキ、マツなどの類については、かなり手当が厳しい状態にあるというふうに考えている。

製品について、最近の国産合板の年間生産量を見ると、コロナ前は334万<sup>m</sup>、2020年は1割ぐらい減って299万<sup>m</sup>、300万<sup>m</sup>を切った。2021年は317万<sup>m</sup>と、コロナ前の95%ぐらいまでに回復している。

今年4月までの国内生産の合計を見ると、105万<sup>m</sup>ぐらいで、前年の同期に比べて0.8%増加、徐々に増えてきており、今年の年間生産量合計についてコロナ前の水準は無理かもしれないが、320万<sup>m</sup>程度は確保されるのではないかなと、期待していた矢先、西日本の合板工場で火災があった。規模の大きいメーカーで、長尺の構造用合板などもつくっているのだから、せっかく合板需給が徐々に回復してきたところであるが、また逼迫するのではないかと、危惧しているところ。

ロシアの影響に関して、先ほど複数の団体からも話があったが、中国からの針葉樹合板輸入が増えている。ロシアのラージ単板が中国へ流れて、中国でJAS認証もとった合板として製造され、日本に流れてきているが、先ほども何人かの方からお話があったように品質面での懸念もあり、今後の動きを注視しているところ。

### ○日本集成材工業協同組合(清水氏)

毎月、組合員の生産量の状況を聞いている。それによると、この1月から6月までの累計(6月は見込)で見ると、前年度並みである。

しかし、販売については、昨年の毎月の平均に比べると2、3割落ちているというようなメーカーもある。

一方で、スギの集成材、管柱のメーカーは、需要は引き続き強いということを言いつつも、価格は天井感があると話をしている。

輸入ラミナでの製造が7割ぐらいになっているが、今のところラミナは順調に入荷しているところ、やや遅れているところがあるが、今のところ特段問題はないと思っている。

また、先ほど来の話で、合板不足の問題や住設機器の納期遅れで、住宅建設が滞っているという話やプレカット工場もかなり在庫があるということ、また、受注も伸び悩んでいるという話も聞くので、集成材に限ったということではないと思うが、今後の住宅着工がどうなるかと、やや心配なところがあると思っている。

国産材への転換という話では、ウッドショックを受けて、国産材の集成材を少し増やそうと思っているところもあったようですが、乾燥施設を入れるとなると、もともと外材比率が高いのでということで、要望が聞き入れてもらえないという話は時々聞こえている。

### ○全国LVL協会(平沼氏)

需給動向は、近年、引き続きLVLに対する需要は伸びている。特に中大規模の建築や構造材に対する需要も増えている。統計上も、会員企業からの報告、あるいは農水省で発表されている木材統計においても、順調に伸びている。

ロシア材の影響について、会員の一部企業では、ロシア材、単板を使っていたが、これが入手困難ということで、代替材の確保に向けた検討が行われている状況。

また、当協会としては、林野庁の補助事業で、国産材への転換の事業等をいただき、また、JAS改正などの背景もあり、二次接着がやりやすくなっているということもあって、国産材、スギを活用した、カラマツやその他樹種と貼り合わせていくハイブリッドな横架材や床材など、今まで使われなかったところにも需要拡大をしていくことを検討している状況。

#### ○全国森林組合連合会(菊地氏)

全国の共販所のデータから簡潔に報告する。

まず、丸太の価格については、5月の共販所の平均の価格で、スギの柱材が1万6,200円、中目材が1万5,500円。ヒノキの柱材が2万3,300円、同じく中目材が2万3,500円。一時期に比べますと、価格は落ちついてきたものの、平均すると、昨年対比、まだ120%から130%、一昨年対比で150~160%で、相変わらず高値を維持しているという状況。

販売量については、スギは5万8,000立米で、前月から8,500立米と大幅増加している状況。ヒノキの販売量は2万3,000立米で、500立米程度減少した状況。

今年は比較的天候に恵まれ、全国的に見ると、素材生産量は順調に推移していると思っている。特にスギ原木の販売量は大幅に伸びて、近年ではほぼ最高の販売量となっている。

昨年、ヒノキは、御案内のように高値で取引されて、かなり産地からの出材量も増えたので、ここに来てスギに転じているのかなという状況だと思うが、現場は相変わらずフル生産で稼働の状況。

これからの季節は、全国的に梅雨に入り、素材生産量が落ち込んでくる季節になる。今後、工場の受け入れ状況等も気になるところだが、この時期は特に出材した原木を長く置いておけば、当然、虫の害も懸念されるので、できるだけ早く、出材した丸太を納材できるよう努めていきたいと思っている。

山側としては、これまでも川中、川下の需要に応えられるように取り組んできているが、引き続き連携を図りながら、量、それから価格の安定化が重要と考えている。

森林組合系統としては、中長期的な施策として、現在、林野庁の緑の雇用事業による人材育成、森林施業プランナーによる集約化、境界明確化事業、こういったものを積極的に進めているところであり、引き続き出材量の確保に向けて取り組んでいきたいと考えている。

また、あわせて、引き続き米国、ロシア、中国等の情勢等もしっかり注視していきたいと思っている。

#### ○座長(藤掛氏)

事前にお話しした10の団体からお話をいただいた。その他の団体からも情報提供があればお願いしたい。

#### ○日本木質バイオマスエネルギー協会(藤江氏)

木質バイオマス燃料について簡単にお話しする。

既に稼働している発電所の多くでは、安定供給協定等により現時点では燃料材不足の声は小さいが、一部の発電所において、燃料材が十分確保できていない、あるいは、今後の不足を懸念する声も聞かれる。さらに、今後、新規の発電所の稼働が予定されているので、マテリアル需要が横ばいと見通される中で増加する燃料材需要に対応するためには、一部では移動式チップの導入により未利用材の搬出を進めるなどの動きも出ているが、地域の特性に応じて、製材、合板、製紙、そういったマテリアル利用を含めたサプライチェーン全体の課題として対応すべき段階ではないかと思っている。

#### ○全日本木材市場連盟(柱本氏)

木材市場の関係では、製品市場では、昨年ほどの価格ではなく、今年になってから下がってはいるが、高値安定という状況。原木も同様。昨年、製品も原木もヒノキが上がったが、その後下がって高値安定。スギは原木も製品もそれほど下がっていないという状況。

本日、山側の意見があまり出なかったが、山側の方からよく聞く意見は、国産材の安定供給、つまり再造林を行って持続的に木材を生産していくためには、人材育成など長期的な投資が必要なので、山元に安定的に利益を還元できるようにしてほしい、そのための適正な立木価格の実現が必要であるという声がよく聞かれる。

木材市場としても、透明な価格設定や付加価値向上を通じて山元への利益還元、それから製材については、ストックを持っておかないといけないので、製品のストックの役割、川下川上へのタイムリーな情報発信やコーディネーターの役割を果たして、木材の安定供給に貢献していきたいと考えている。

#### (4)意見交換

##### ○座長(藤掛氏)

それでは、これからフリーに意見交換できればと思います。

多岐にわたる御報告をいただきましたので、その中で、特に御質問したい点もあったと思います。

御意見、御質問、どこからでも構いませんので、パネリストとして御参加の皆様から御発言をお願いしたいと思います。

全木連の本郷さん、お願いします。

##### ○全国木材組合連合会(本郷氏)

先ほど四国の協議会の方から、外国人の技能実習制度への木材加工の取組を情報提供してほしいという話があったので、私から話をしたい。詳しくは改めてホームページを見ていただくなり、全木連に問い合わせてください。今、木材加工の関係の試験をするための試験機関としての認定をいただくための試行試験を6月に行うという段取りになっています。その試行試験で、十分試験ができる団体だと認められれば、(年内には)試験機関として認定をいただけるのではないかとというふうに思っている。

この試験は、初級と専門級に分かれておりまして、1年の技能実習をしている間に、この初級の試験を受けて、通れば、次、3年目の習得技能の評価としての専門級ということで、1年、3年、5年という技能実習の制度に乗せていくことができるという仕組みにしようと思っている。

そのような形で進めていかなければならないのですけれども、時間もないので一つだけ申しますが、安全に対する取組を非常に強く厚生労働省から注意というか求められており、日頃の安全の取組だけではなくて、第三者によるチェックとか指導をちゃんと受けるよう、今、我々のほうにお問い合わせのあるようなところにはそういうお話をしているところ。

また、ハンドブックみたいなテキスト集を販売しているので、御覧いただきたい。

##### ○座長(藤掛氏)

私から一つ、質問をいたします。まず、今日、全般的にお話聞いておきますと、国産材、特にスギに関しては、大分安定してきたということで、価格だけは高いけれども、量的には大分安定してきたと。カラマツやヒノキ、特に東北や北海道では、まだそういう状況でないというようなことですが、全般としては大分落ちついてきたという中で、二つ、懸念が示されていたのは、一つは、住宅着工、今のところ順調に着工もされているけれども、今後、転嫁が進んで、2割ぐらい住宅価格が高くなっているという中で、今後の受注がどうなるかということが心配されているということと、それと、輸入材がだいたい港にたまってきたりして(思惑で買った分も含めて)、今後、そこがだぶつき、また、今後の契約において値段が下がってくる可能性がある。

ただ、円安もあるのでというお話もありましたが、全般的な基調としては緩いのかなというふうなことが、今後、この二つの要因が、国産材なり木材全体にどう影響を与えるのかということが皆さんの気になられるところではないかと思いました。

そういう中で、特に輸入材が少し余っているのではないかとのお話だったので、木材輸入協会の針葉樹部会の眞竹さんに伺いたいのですが、いかがでしょうか。値崩れとか、それにつながるのか、それが国産材に影響していくのかということ懸念する一方で、輸入とか、ものの動きとしてはそんなに余りそうにないような気もするのですが、余っているということは、もう国産材への転換が進んでいて、あまり輸入材を使わなくなっているという動きの現れとも見えるのかみたいなことが気になっていまして、そこまでは言えないのですかね。そのあたりの、輸入材が今、少し港でたまっているという状況をどう考えたらいいのか、今後に対してどう考えたらいいのか、もう一度御意見いただければと思います。

### ○日本木材輸入協会針葉樹部会(眞竹氏)

まず現状については、特に欧州材、昨年来のウッドショック以降、たまっていた発注残、これが物流の問題が一時的に解消されたことによって、大量入荷したと。なかなかロシアの問題もあったり、その辺の憶測もあったりして、ある程度堅調に受注を進めていたというところで、現状、ポート在庫はピークの状況にあるということだと思います。

ただ、今後については、まず価格面は、現地価格はそういう状況もありましてある程度調整が入ると思いますが、円安ですので、そこまで円建ての価格を極端に下げるといふふうなところまでは、まだ我々としても至っていないという状況です。

あとは、長期的には、やはり北米の住宅はまだ不足しておりますし、短期的にちょっと荷余り的な感じにはなっておりますが、ロシアの状況も含めて、現時点の状況で、今後、ずっと市況が下がっていくということを判断するというのは、まだ時期尚早ではないかというふうに思っています。

### ○筑波大学(立花氏)

私が気になっていることを伺いたいと思います。眞竹さんに御質問することになるかなと思いますし、林野庁の齋藤課長にもぜひお考えをお聞かせいただければと思っています。

アメリカ合衆国における政策金利の引き上げ、さらにEUにおける基準金利の引き上げ、これはそれぞれの国における住宅着工を減らす方向へといくと考えられるわけですね。そうすると、市況が落ちてくるのだろうというふうに考えられます。多分、これから年末年始、来年に向けてそういった方向性になっていくのだろうと思いますが、そのことが日本の輸入、もしくは日本の市況に対してどういった影響を与えるのか、このあたりについて、今、藤掛座長の御質問にも関わって、非常に気になっているところですので、質問したいと思います。

そうした中で、ぜひ国産材を根強く使っていくことを、我々、広めていくことが大事かなと思っています。是非、お二人から回答をお願いできればと思います。

### ○座長(藤掛氏)

眞竹さん、お願いいたします。

### ○日本木材輸入協会針葉樹部会(眞竹氏)

住宅に関しては、北米、欧州、ニュージーランド含めて、金利上昇による影響というのは、短期的には多少出てくるのではないかと思います。現時点で、弊社の北米住宅もやっておりますが、まだ極端な影響というのは出ていないと見ています。

ただし、米国国内の北米の製材品の市況は、3月あたりをピークに、価格は、ほぼ半値ぐらいまでかなり下がってしまっていて、ここへきてようやく底を突いて、若干反発してきているかなというような状況です。

ただ、先ほどの重複になりますが、長期的に、やはりまだまだ住宅需要に対して供給が不足しているという状況は続くと思いますので、これは個人的な意見も入りますが、一時的な状況ではないかというふうに見ております。

### ○筑波大学(立花氏)

それは北米についても欧州についても同様に言えると考えてよろしいですか。

### ○日本木材輸入協会針葉樹部会(眞竹氏)

そのように考えております。

### ○座長(藤掛氏)

ありがとうございます。

それでは、林野庁産業課、齋藤課長、お願いします。

### ○林野庁林政部木材産業課長(齋藤氏)

正直に申し上げますが、金利の上昇と、現地における着工、あるいは景気の動向が、我が国の輸入に直接どういう影響を与えるかということについて、私自身、あまり知見を持ち合わせておりません。

一方で、金利の上昇というのが、新聞、あるいはテレビの報道にもありますとおり、円安傾向を生んでいるということについては、我々、懸念を持っております。今年に入ってからだけでも、円安にかなり振れています。1月ぐらいを思い返していただければ、まだ1ドル115円という状況だったわけで、それが直近、135円までできている。これはストレートに輸入環境ということであれば、非常に大きな影響だというふうに認識しています。

一方で、国内の需給を考える上では、本日も非常に示唆に富むたくさんの御意見をいただきましたけれども、国内の着工戸数の動向ということが大きかろうというふうに思っております。

国内の製造メーカー各社、国産に関しては、フル稼働ですと対応してきておりますし、原木の調達難しさというのも、私どもの事業も御活用いただきながらということでもありますけれども、何とか対応できているのではないかなというふうに思っておりますが、やはり住宅着工がシュリンクしてきますと、それを見込んだ輸入も含め、国内製造というのも急激には対応できない部分があるので、そういったところの懸念というのは、引き続き私ども、持っております。

ですから、こういった場を通じまして、あるいは統計のデータ、あるいは業界を通じての情報ということに、引き続き私ども注視をしております。冒頭、私のほうからは、年内をめどにというふうに申し上げましたけれども、状況が逼迫してくるようであれば、また少し時期を早めてということも含めて対応していきたいと思っております。

### ○座長(藤掛氏)

久保山さん、御発言をお願いします。

### ○森林研究・整備機構森林総合研究所(久保山氏)

私からは、感想というか意見、二つほど質問をしたいと思えます。

外材の値段が上がって、鉄骨やRC等も資材が上がっている中で、その辺を国産材がとっていく、非常にいいチャンスだと考えています。

ただ、それに対して、国産材の製品も倍ぐらいに上がっている中で、冒頭の統計を見ますと、丸太の入荷量は2019年比で100%を超えていないということにすごいショックを覚えました。そのあたり、いろいろな発表で、KDがボトルネックだという話が出ていまして、私もそう思っているのですけれども、その辺の投資が、そもそもこの1年、どうだったのかというのを、齋藤課長か本郷さんに伺いたいと思えます。

製品はまだ高止まっていますけれども、もう既に丸太のほうはちょっと弱含んできているように私は感じていまして、そもそも製品が2倍に上がっているのに、丸太は1.5倍ぐらいしか上がっていないというのは、その値詰まりところなのかなと。KDが増設されない限り、その辺は解消されないだろうということと、先ほど来、製品がたまりつつあるという話がありましたけれども、国産材製品が、横架材とか、新たな市場に向かっているか、今後、値崩れが製品も激しくなる可能性をちょっと危惧していまして、このあたりは技術開発、私どもの研究所も当然ですけれども、マーケティングとか、そういったことが重要になってくると考えています。

もう一つ、ロシア材に関して、品質の話が出ていしましたが、私が参加したとある会議で、違法ではないのか、使っていて大丈夫なのかという意見が出まして、ただ、ESG的には、ちょっと私は問題かなというふうに考えていて、このあたり、どう考えたらいいのかというのが2点目です。中国からの迂回にも当然関わってくる話なので、伺いたいと思った次第です。

### ○座長(藤掛氏)

では、1点目に関しては、川中の設備投資等、どういうふうに進んで、あるいは技術開発も進んで、国産材の

転換を進めるような状況になっているのかということ。

2点目は、ロシア材が迂回して入ってきているという状況に対して、それはいいのかというようなことですが、林野庁さん、あるいは全木連さん、お願いできればと思います。

#### ○林野庁林政部木材産業課長(齋藤氏)

まず、国内の設備投資の動向ということで申し上げますと、全体を見るふさわしい統計というのは残念ながらありません。一方で、私ども、そういった加工施設の整備に対する支援というのを補助金の形でやらせていただいております。これがおおむね2分の1補助なので、それを倍にすると、少なくともその規模の投資は行われたということが分かると思います。

ちょっと遡って見ていくと、まず平成30年は、国費を2倍して、事業規模でいうと300億円規模ありました。令和元年については100億円規模です。令和2年については300億円規模、令和3年度ということで申し上げますと、やはり300億円規模という形で投資が行われているということが分かると思います。

ただ、ここ、お気をつけいただきたいのは、工場に対する加工施設、あるいは乾燥施設に対する整備というのは、早いものでも1年単位、長いものだと2年単位のタイムラグがあるので、言ってみれば、前年ないし前々年に投資されたものというのが効果を生み始めるということです。ですから、リアルに毎年の設備投資の額が直近を反映していないということがあります。

昨年のウッドショックが始まったタイミング、やはり乾燥施設が足りないとか、そういうことのお声も強かったですし、実際に設備投資もしていただきましたけれども、この部分が効果を生んでくるのは、早くて今年の後半ぐらいとか、そういう感じになってくるということです。

久保山先生がおっしゃった、2019年と比べて素材生産量云々というお話ありましたけれども、ここは、やっぱり需要の総体と比べて見ていかないといけない部分があって、精密にこれも測定できないところがちょっと悩ましいところなのですけれども、2019年時点の着工というのは90万戸以上ありましたから、それに対する需要に国産材がどう応えていたのか、直近が85万戸の水準の昨年対して国産材がどう応えていたのか、そういうことを大雑把に見ますと、やはり輸入材が不足している部分を国産材がカバーして、何とかやりくりしているという状況が浮かび上がってくるのではないかとこのふうには思っています。増産が十分にできていないというのは、現在の住宅着工戸数が85万戸の水準ぐらいで、今年の見通しもそのぐらいの雰囲気の話がなされている中で、さらに大幅に増産をするということの難しさというのがあるのだらうと思っています。

もう一つは、迂回の問題、これはもちろん我が国のほうで完全に禁止している品目、輸入を禁止している品目について、関税のコードが変わらない形で輸入してくるというのは、完全にこれは迂回輸入ということになると思いますが、実際問題として、何らかの加工がなされて入ってくるものについては、これは法規制という意味では規制のしようがありません。

さらに、先ほど来、ちょっと気にもなっていたのですけれども、お話の中で、品質の悪い、JASをとっていながら品質に難があるというお話というのは、本当にそうなのかという、ちょっとエビデンスがないと、なかなか難しい議論かと思えます。

ですから、これはそれこそ業界団体の皆さんとしても、そういう粗悪品が出回るということの懸念というのはおありでしょうから、サンプルをとってみるとか、そういうことでしっかりとエビデンスを確認した上で、JASを管理している当局に対しても話をしていかなければいけないというふうに思います。全くの風評で、中国産イコール粗悪品というふうに言っているのかどうかというのは、正直、私も今、情報がありませんので、ちょっとコメントは差し控えさせていただきたいと思います。

#### ○森林研究・整備機構森林総合研究所(久保山氏)

アメリカでは、製品ベースで1,000万立方以上の製材加工能力の増設がされたという報道もあって、日本はなかなか難しいなというふうに思いました。

#### ○全国木材組合連合(本郷氏)

齋藤課長が話してくださったとおりなのですけれども、もう一つ、大きな問題として私が感じているのは、人

の問題です。製材工場における労働力、人材の確保ということが問題の根底にあると思いますし、それは素材生産でも同じ問題だと思っております。

そういう意味で、設備投資をすれば生産量が増えていくというようなことにはなかなかならない。機械による生産性の向上ということが起こっても、それは中小の製材工場が逆に操業停止していくというようなことも起こるというようなことで、全体の生産量、林野庁の資料にあったとおり、19年ぐらいのところだとまっているというのは、そういうことではないかなというふうに思っています。

乾燥機の話も、乾燥機を発注して、先ほど齋藤課長からありましたけれども、半年ぐらい、納入、場合によっては1年ぐらいかかるとか、そういうものづくりの能力の、日本の全体の低下もあるのかなというふうには思いますけれども、いずれにしても、最後、齋藤課長が言われたように、需要に応じて、今、生産しているという状況は、私も報告したとおり、合板も全く同じような動きをしているわけで、住宅の着工とか、そういうものに応じて増減しているということで、その需要に応じて供給できてきたということではないかと思っています。

#### ○座長(藤掛氏)

それでは、私の座長の役はこれで終わりました、最後、齋藤課長から手が挙がっていますので、御発言いただいた後、事務局にお返しします。

皆さん、活発な御意見、ありがとうございました。

#### ○林野庁林政部木材産業課長(齋藤氏)

本日は長時間にわたりまして、貴重な御意見いただきました。誠にどうもありがとうございます。

最後に一つだけ、お願いをさせていただきます。

先ほど本郷副会長の外国人材のお話の中で、安全のお話が出ていましたが、まさしく私ども、これから国産材の安定供給をしていく際に、設備に加えて、人の投資ということをしていくわけなのですけれども、木材産業の災害発生率というのは、建設業の2倍以上、他産業の4倍というような状況でございます。さらに、林業に関していうと、非常に高い千人死傷率という、残念な状況があります。

昨今、非常に消費者の意識が高まっている中で、そういったことを早急に解消できないと、せっかく国産材を安定供給していくということの中でも、やはり消費者の皆様の御理解というのを得られないのではないかと、非常に危機的な感じを私どもも持っております。

こういった会合の折には、私ども、必ず申し上げるようにしているのですけれども、今日は特に中央団体、あるいは地域でも中心的な皆様がおそろいなので、いま一度、作業安全の徹底ということについて、私どももさまざまなマニュアルなど、提供させていただいておりますけれども、ぜひぜひそういった取組を御協力いただきますようお願い申し上げます。

#### ○全国木材組合連合(本郷氏)

先ほど私の発言で、1点、間違いがございまして、訂正をしておきたいと思えます。

試行試験の実施は、6月ではなくて9月とのことでした。9月に実施してということですが、来年度から、技能実習生を受け入れられるように、早急に取り組んでまいりたいと思っております。

(以上)